

第二期 第一〇三号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 02. 10 定有堂書店 発行

術理について

泉鏡花と橋田邦彦の接点をめぐる妄想

「本のある場所」日記 二〇二五年一月

「情けないわ」の使い方日記

日々是雑言(ぞうじん)

We Can Work It Out.

本を作る側から (23)

これでいいのだ

汽水のほとりから (46)

身のない話 (前)

内坪井町日記 (9)

演じるための身体

星をみる

「」案内・編集後記

奈良 敏行

岩田 直樹

南陀楼綾繁

鳥居 貴彦

萩原 俊郎

高木 善祥

村瀬 謙介

古賀 啓三

小原 修治

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラマメリア

術理について

奈良 敏行

(定有堂 主人)

定有堂

『町の本屋という物語』の表紙絵を描いた千枝さんに、「本とか本屋についてはずいぶん語るのに、なぜ太極拳については語らないの?」と問われた。

本屋を始めたのは一九八〇年で四十三年続けた。太極拳は一九九四年に開始したので三十一年になる。始めたきっかけは健身。続けた理由は、本屋という稼業に「外部」を設けたかったから。本屋や定有堂教室は「まち」の人たちが集まってくる場所だ。自分が出かける全く異質の空間が欲しかった。異質なのが、「学び系」という意味では同じ事だった。本屋修行と武術修行。本屋の学びも、秘訣とつながりを求めて、全国各地へと足を運んだ。同じように武術修行も、術理を尋ねて各地へ出かけた。

いまだに元気なのは術理のせいではなく、初心の動機だった健身探求の積み重ねのおかげだ。術理の方はどうも身体を損なうものだった。A級指導員の認定証を手にしたのは二

○一三年のことだ。

先日新入会員の人に、太極拳を始める動機を聞いたら、「武術に興味があるから」という答えだった。「具体的なきつかけがあったんですか？」と問いを重ねたら、「甲野善紀さんと前田英樹さんの本を読んだから」ということだった。術理(理念)探求家とフランス思想研究者で剣術家(新陰流)の往復書簡集だ。『剣の思想』青土社(二〇〇一)。

武術より健身の方がいいのにな、と思いながらも懐かしいものがあつた。この本には二人の愛刀の写真があつたと記憶する。ある講習会で出会い意気投合する。投合の証は愛刀の見せ合いとなる。太極拳には「拳友」という言葉がある。剣術家はなんとこのだろうか。

わたしはこの新入会員のの人に、じつは自分は甲野さんの言葉を大事にしていると告げた。

『できねば無意味(できても無意味)肯心自らを許す。』

わたしは太極拳の極みは、いずれ「ひとりきり」で行うことだと信じている。一人だけで追求する術理、それは「できても無意味」の境地だと思う。「できる」とは何だろう。自分の身体に聴き続けることだ。この武術の術理、理合が「できている」だろうか、と自分の「からだ」に問い続けることだ。

太極拳は言葉の国中国の武術なので、要諦が言語化されている。三尖相照、虚領頂勁、気沈丹田、尾閭中正、数え上

げればきりが無い。剣術は言語化が少ない。理合は口伝によるところが多い。

わたしは二つのことを目標にしている。「平目平視」と昇降開合(この二つだ。初歩と極意と考える)。

初めて甲野さんの道場の写真を見たとき、あまり広くないのに驚いた。そうか直線的なスピードは必要なのか。瞬時の間合いに生命線があるのかと理解した。

わたしは二つの刃引き刀剣を持っていた。太極剣と日本刀だ。日本刀を神保町まで買い求めに行つて、発送を頼んで到着した夜は日本刀を胸に抱いて布団の中に共寝した。うれしかったのだ。二つの刀剣の重みはずしりとしていた。しかしだんだん軽いもの短いものがないように思うようになった。剣は身体の延長というが、最後は身の丈だけでいいと思えるようになったからだ。

外部へ旅立つたはずの太極拳は、いつしか本屋の二階で人を集めて行うようになった。ここだと本屋の仕事の合間に行うので移動の距離を短かくできる。本来は自分のトレーニング室だった。けてして広くはない。狭さを活かしたレッスンができたと思う。身体と対話することを主とした術理だ。週に二回のレッスン日を設けた。それとは別に自分一人の練習日も設けた。自宅近くの公民館だ。

本屋を閉めたとき、身体の不調もあり、週に二度の指導

だけに絞り込んだ。市役所の大きなホールを会場に選んだので、広さを活かした太極拳に移行した。あまり細かいことを言うのを控えるようになった。自分自身の練習量は減ったのだが、身体はすこぶる快調になった。すべからくやりすぎだったのだと気がついた。

鉄製の太極剣は四段に昇段した人に記念にあげた。日本刀の方は近々昇段予定の人にあげる約束をしている。二つの道具は手元から消えるが、しかしまだまだたくさん道具が残っている。

こんなならましでよかったですでしょうか。千枝さんは時々わたしの動作をまねしてみせるが、あんがい千枝さんの方が素質に恵まれている。お稽古事にはまったく興味のない人なのが惜しい。ひとりて本を読むだけの人なのだ。

2025.01.24

(参考)

甲野善紀 前田英樹 『剣の思想』 青土社 2001

・笈の定有イラスト



奈良敏行十三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年三月五日

泉鏡花と橋田邦彦の接点をめぐる妄想

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授・)

「読む会」講師)

先日、拙著『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』(二〇二三年)を読んだ知人から、泉鏡花(一八七三—一九三九)と橋田邦彦(一九八二—一九四五)はどういう経緯で出会ったのか、という質問があった。

ある本を読んでいたら、泉鏡花の座談会に橋田邦彦が出席していた。どうやら鏡花が招いたらしい。「あれっ?」と思ってネットで検索すると、鏡花の名品『日本橋』の主人公のモデルは橋田とある。

鏡花は文化の薫り高い旧加賀藩金沢生まれで、父は象眼細工・彫金の職人、母は能楽太鼓方の娘。長じて上京して尾崎紅葉の門下生となり、生涯にわたり旺盛な執筆活動を続ける。鏡花は高等教育とは縁がない。当時の超エリート東京帝大教授との接点はどこにあるのか。

うーん、困った。泉鏡花は高校国語の授業で習った程度の知識しかない。文学史は最も苦手とする分野だ。鏡

花の作品のうち読んだことのあるのは『高野聖』(一九〇〇年)と『日本橋』(一九一四年)のみである。前者は代表作だからという理由で、後者は橋田絡みで読んだに過ぎない。

『日本橋』(岩波文庫、一九五三年)をぎゅっと読み返す。花柳界に入りする医師と芸妓たちとの話である。佐藤春夫の解説がすばらしい。

「その頃、自然主義流が好んで色情を描き肉欲に非ずば真実の愛でないやうな唯物的な考へ方が一代を風靡したのに対して、古風な人、鏡花は彼の信ずる愛情というものの在り方に就て、ひそかに作品に託して頑強に抗議したのが、この「日本橋」一篇の作意である。…この一事に思ひ及ばなかつたならば、…この美しい物語の調和…、この作品がわからずじまひになるのである。」(二〇二—二〇三頁、常用漢字に直した。以下同様)

佐藤は思わせぶりにこうも書いている。

「『日本橋』の主要人物には或はそれぞれにモデルらしいものがあるかもしれない。そんな話も耳にしないではなかつたが、作中人物のモデル詮議などは、せつかくの芸術を世間はなしにひき下げる井戸端会議趣味の無用な知ったかぶりである。…ひとりこの一篇とは限らず鏡花

の文学はすべて夢幻的ながらに現実に即したヒューマニズムの文学である。」(二〇三―二〇四頁)

橋田の愛弟子、杉靖三郎が編纂した『正法眼蔵の側面観』(大法輪閣、一九七〇年)には、眼蔵に関する橋田の小文が収録されている。その末尾に、杉の解説文「正法眼蔵と橋田邦彦先生」がある。

「科学を愛される先生はまた芸術を愛された。かの泉鏡花とは学生時代から互に相許した仲であられ、鏡花の名作『日本橋』の主人公・葛木晋三こそは、橋田先生がモデルであることは、知る人ぞ知る。」(三〇五頁)

佐藤の記述は、巷では作中人物のモデルが誰かは「知る人ぞ知る」だったことを匂わせている。これは杉靖三郎の回想と一致する。それにしても、鏡花と橋田の接点は何なのか。ひよっとして、と思いついたのが、尺八である。

東京大学生理学同窓会編『追憶の橋田邦彦』(鷹書房、一九七六年)には、弟子、親族、知人たちが橋田の学者以外の側面も追想している。その中には花柳界の記述はない。知っていても書けなかったのだらうか。

橋田邦彦を義兄にもつ橋田篤(岡山医専出身の医師、地元在住)が、こんなことを書いている。

「趣味は音楽就中楽器を好み幼い頃はハーモニカを、稍長じては尺八殊に普及流を修得したが、禅研究の結果か手段が判らぬが、追分節は堂に入ったもので内山教授(注―同僚の内山孝一教授)との連管には恍惚としたものだった。」(二四九頁)

『追憶』巻頭には多くの写真が掲載されており、その中の一枚が橋田篤宅の縁側での橋田と内山の連管の様子である。橋田は生まれつき音に敏感で、電極オシログラフを用いた日本人の発声についても研究している(日本発声学の先駆的な業績)。音楽が趣味ゆえの研究だったのかも知れない。

ここからは私の妄想である。

橋田は鏡花と尺八仲間であり(師が共通?)、鏡花の誘いで花柳界に入り入りするようになり、若い芸妓と出会う……。

私は鏡花の交友関係を全く知らない。尺八も思いつきに過ぎない。

どなたか二人が出会ったきっかけをお教え願えないだらうか。

「本のある場所」日記 二〇二五年一月

南陀楼綾繫

(ライター・編集者)

1月11日

朝7時の飛行機に乗り、徳島へ。空港でミニコミ『ハードスタッフ』の小西昌幸さんが出迎えてくれる。この日から4泊5日で徳島、高松、松山の「本のある場所」をめぐる旅がはじまった。

一番の目的は、徳島県立文学書道館で「編集者・谷田昌平と第三の新人たち 徳島編」展を観ることだった。谷田は徳島出身。新潮社で遠藤周作、小島信夫、吉行淳之介らを担当。多くの名作を生んだ「純文学書下ろし特別作品」をスタートさせ、『新潮』の編集長も務めた。同社の後輩だった池田雅延さんの講演会もあると聞き、徳島行きを決めた。

それだけで終わらず、「書庫拝見」用に文学書道館の取材することになり、高松では香川大学図書館の取材も決まった。松山では以前から注目している創風社出版も取材することになった。

さらに、徳島県西部の、かつて藍で栄えた脇町にある古

民家施設へうだつ上がるでトークイベントが決まった。聞き手はその中にある本屋(Phill books)の高橋さん。当日は県内から若い人たちが集まってくれた。この日の宿は脇町の集落にある(泊まれる本屋まるとしかく)。関東から移住したうちだみくさんが古民家でゲストハウスと新刊書店を開業。座敷でゆつくり寝た翌朝は、鳴門わかめとじゃこのごはんを堪能し、隣にある本屋で棚を眺める。小さいが、最近出た本をいち早く並べるきめ細かい品揃えに唸る。

高松のトークはいつもの(本屋ルヌガンガ)。店主の中村夫妻は素早く丁寧に対応してくれるので信頼できる。聞き手は高松で『些末事研究』を発行する福田賢治さん。たまたま高松に遊びにきたライターの荻原魚雷さんも飛び入り参加してくれ、盛り上がった。終わってから仏生寺温泉に入り、福田家に泊めていただく。

松山を訪れるのは久しぶり。松山で自称「絵日記作家」として独自のペースで活動する神山恭昭さんと(本の轍)でトーク。翌日は、神山さんと自転車で三津浜まで行く。ドキュメンタリー映画『ほそぼそ芸術ささやかな天才、神山恭昭』の登場人物のひとりになったようで嬉しい。いろいろ詰め込みまくった四国の旅だった。

1月24日

JR東日本で新幹線も特急も乗り放題の「大人の休日倶楽部パス」を利用して山形と新潟へ。初日は米沢で降りて、図書館と古本屋の〈禅林堂〉〈羽陽書房〉へ。歩道に雪が残っていると歩きにくい。おばあさんが店主の駅前の喫茶店へやまびこはナポリタンが絶品だった。米坂線で羽前小松。いつもの一楽荘に投宿し、隣の〈新喜楽〉で井上ひさし研究家の井上恒さんと飲む。

翌日は川西町フレンドリープラザの遅筆堂文庫で調べ物。井上ひさしの蔵書を眺めているといろんなアイデアが湧く。隣の長井市で農業を営む菅野芳秀さんと初めて会う。190センチの大男で、「百姓」としてのプライドを持って農家を続けてきた。地域人ライブラリーで『生きるための農業 地域をつくる農業』が私の本と同時に刊行された。午後は米沢の山奥にある田沢寺で「カンダラ」の会。巨大な寒ダラを一尾まるごとさばき、鍋や刺身で食べる。シメに食べた、白子がたつぷり溶け込んだリゾットが旨すぎる。魚の本を1冊持参する趣向で、旅先で食べた魚が出てくる山本志乃『旅人の食』（教育評論社）を紹介。夜は小野川温泉に入り、寺に泊まる。

翌朝、新幹線で山形駅へ。雪が降ってきたが、コミュニケーションで町なかの本屋や図書館を回る。15分50円で貸し借りできるスポットも多く使い勝手がいい。夕方か

ら元小学校の施設Q1内の〈ペンギン文庫〉でトーク「小さな出版物のつくり方」。15名で満席。若い人ばかりですごく熱気。打ち上げは「さよならデパート』『花街アワー』など山形の歴史ノンフィクションを執筆・発行するスコップ出版の渡辺さんが営む小姓町の〈記念日〉。どの料理も工夫されていて美味しい。

翌朝、山形新幹線で大宮、上越新幹線に乗り換えて新潟へ。大回りだが、日本海側ではもう直通の列車が走っていないのだった。新発田の〈吉原写真館〉で本づくりワークショップ。福島県昭和村から農家の菅家博昭さんと、奥さんで本屋〈燈日草〉の店主の洋子さんも参加。他の人たちも何かしらの活動をしている人ばかりで、その話を聞くだけで時間が足りなくなかった。歴史ある写真館のスタジオが会場というのも最高の雰囲気。終わって名店〈きんつばや〉で打ち上げ。おでんが美味しい。新潟駅に戻り、〈北書店〉の佐藤さんと落ち合って、定宿の塚田旅館で二人で飲む。翌日も旗野秀人さんと昼から飲み。たつぷり話して夜に東京に帰った。

(編集部注)

南陀楼綾繁 『書庫をあるく アーカイブの隠れた魅力』 皓星社

2024.12

南陀楼綾繁 『「本」とともに地域で生きる』 大正大学 2024

「情けないわ」の使い方日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

おもてのマガジンラックに置いてあったコロコロコミックがなくなっている。朝はたしかにそこにあった。テキストな本屋だが在庫管理はちゃんとしている。といっても何十冊も仕入れたうちの一冊ではなく、二冊しか仕入れていないのですぐにわかるというだけのことなのだ。

二日前に、御池通の道端で二冊をトラックの運転手さんから受け取りました。時刻は九時でした。翌日の三時ごろ、いつものくくんが学校の帰りに見つけてすぐに買っていきましました。七百円でした。では、残りは何冊でしょう。

答えはすぐにわかる。すぐに分かったとして、それがいいことなのか悪いことなのかはよくわからない。気づかない方がしあわせなときもある。

家財整理をしているおっちゃんから電話がかかってくる。ずいぶん前に本の買い取りの依頼があり、そこで空になった本棚をなんとかして欲しいとたのんでいたのだった。おっちゃんは「今な、ドラッグストアでゴミ袋とサンドイッチ買ったんや。サンドイッチだけ食べて寝るんや。今日は疲れた」と言う。それが用件なのだろうか。「長岡の向こうにな、工具を一式忘れてきたんや。明日八条で筆筒をばらさなあかんのに」話はまだ続くようだ。「~~に~~に運転させたらあかん。アクセルを踏みすぎなんや。ガソリンがあつという間になくなる。トラックはようけガソリン食うんやで。それであいつと喧嘩したんや。情けないわ」おっちゃんはもう八十なので運転はしないのだという。ふんふんと話を聞いていたらいつの間にか明日の朝、僕がトラックを運転して長岡の向こうまで行くことになっていた。そのまま八条の家財整理の現場にも連れて行かれるらしい。「人をやとたらな、メシもくわきさんならんし。たいへんや。わしのところには一円も残らへん」おっちゃんから三度目の「情けないわ」が出たところで電話は切れる。

コロコロコミックがなくなつてしばらくはどんな顔をしていたらいいのかよくわからなかった。店の前にならんで

いるものを黙って持っていったらどうなるだろうと想像することは楽しい。見つかったら走って逃げようか、家に持って帰ったら家族にも怪しまれるだろう、どこかに隠したらどうか。自分だけの場所。誰にも言えない秘密。そんなことをぐるぐる考えているだけの帰り道が自分にもあった。それを実行に移すかどうかは別として。

小学生のとき、近所の文房具屋にノートを買に行ったら封筒に入れてもらったノートを抱えて歩く帰り道、ふと封筒の中に二冊ノートが入っていることに気づく。おぼちゃんの間違えて二冊入れてしまったのだろうか。お金はおつりのないように持っていったので二冊分しか払っていない。もしかして自分ほとんどないことをしてしまったのではないか。鼓動が速くなる。そと取り出すと、間違えないようにと持っていった使い切ったノートが出てきた。おぼちゃんが丁寧に同じ袋に入れてくれたのだった。たった数秒間。だが三十年たっても覚えているほどには大きな出来事。

いつ見ても人気がない本屋の軒先。いつも開けっ放しの戸が最近では閉まっている。目の前のマガジンラックにはぞんざいに置かれた最新刊のコロコロコミック。「ここなら

できるかもしれない」と思わせてしまったのは誰だろう。コロコロコミックが欲しくなるような年齢の人に。

「情けないわ」と言う言葉はこういう時に使うのかもしれない。でも、誰に向かって？

コロコロコミックを持って行ってしまった人は、三十年後にそのことを思い出すだろうか。コロコロコミックを持っていた人は、三十年後にもそのことを覚えていられるだろうか。それはいい思い出なのだろうか、悪い思い出なのだろうか。できればいい経験であってほしい。思い出は多いほうがいい。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町818

日々是雜言（ぞうごん）

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

「五十一番目の州」

トランプ米大統領がカナダのトルドー首相に「カナダは米国の五十一番目の州になったらいい」と言ったという。

「素晴らしいアイデアだろう」と自画自賛も加えて。

ふと、米軍機の低空飛行を取材していた昔、滞米生活が長かった友人が「日本が五十一番目の州になったら、そんな問題はすぐ解決するよ」と言っていたのを思い出した。

彼は「米国の州なら、訓練エリア外で低空飛行でもしたら世論の袋だたきに遭う。欧州の同盟国もそう。日本はまあ、同盟国というより、何でもじつとがまん、米軍に思いやり予算まで貢ぐ『属国』だな」と冷めた分析をした。

悪名高い日米地位協定によるもので、石破首相は沖縄國

際大の米軍ヘリ墜落事故で日本が立ち入りを阻まれたのがよほど腹に据えかねたのか、首相就任時から「協定見直し」を掲げている。たぶん相手にされないだろう。何といても属国だから（笑）。

ここはひとつ、トランプとの初会談で「こやかにこう申し入れたらどうだろう。「あの：私たち、カナダに代わって米国の五十一番の州になりたいんですけど」「おお、石破よ、かわいいヤツだ」。ところが、それが「素晴らしいアイデア」でないことがじわじわ分かってくる。

第一、日本から関税が取れなくなる。加えて駐留米軍の経費は全て自前。何しろ「米国内」だから。大統領選の行方は共和も民主も分らない一億人の日本の有権者が左右し、上下院の連邦議会は神道議員連盟の自民党から米國が嫌いな共産党まで進出してくる。カオスである。

「ならば、地位協定ぐらい見直してもいいか」。そう思われたら、しめたものだ。

「いわゆる中居君問題」

女性とのトラブルが何かは分からないが、近ごろはフジテレビ社長の記者会見が話題の中心になった観がある。

フジテレビに大口投資している米國の投資ファンドから

は「われわれは憤慨している。貴社の企業コンプライアンスはどうなっているのだ」と完全に上から目線、まるで戦後のGHQみたいに叱られた。

「欧米の企業は環境、社会貢献、倫理的な企業統治を重んじるESG投資が当たり前。日本は世界から遅れている」と日本の識者はいつものごとく自虐的に語り、残念ながらその批判や指摘は当たっているが…待てよ。

LGBTQを全否定し、「パリ協定」を忌み嫌い、レイシストのような移民排斥で環境や社会の多様性を破壊しているトランプと、そんな彼にすり寄り寄る一部の超富裕層、イーロン・マスクやGAFANなどテック産業複合体がわが物顔で稼いでいるのは一体どこの国なんだ？ エラそうなことがお前たちには言えるのか。

「会見が終わって、失敗したなと思った」。素直に語るフジテレビの社長の方がよほどかわいい。

「不老不死の夢千代」

NHKのBSで「夢千代日記」の再放送が始まり、毎回録画して観ている。最初の放映は今から四十四年前の1981年。脚本は早坂暁、音楽はなんと世界の武満徹。

兵庫県の但馬にある、ひなびた湯村温泉（ドラマでは湯

里温泉）。芸者の置屋を営む夢千代（吉永小百合）は広島で胎内被曝し、白血病で余命数年と宣告されている。

かつて但馬支社で働いたことがあり、懐かしい温泉街の風景が映るのも楽しみだが、まるで昔の溝口健二の映画を観るような静かで濃密、深い人間ドラマに毎回心碎かれる。こんなドラマはもう生まれないものか。

ところで観られた方は「あれっ」と思われたかも知れない。なぜ、海から遠い湯村温泉なのに潮騒が聴こえ、芸者衆が「貝殻節」を踊るのか？ 実は早坂は、鳥取県の浜村温泉を想定して脚本を書いたらしい。

真相は分からないが、浜村温泉は「原爆症に苦しむ主人公のドラマなんて」と断り、「それなら私たちが」と湯村温泉が名乗りを挙げたから、と聞いたことがある。

半世紀近く経って、かつて駅に急行が停まった浜村温泉のにぎわいは失われ、無名だった湯村温泉は「夢千代の里」として脚光を浴び、今も多くの観光客が訪れている。

それにしても、吉永小百合の美しさはドラマの時から少しも変わっていないのに驚く。当時、視聴者から「夢千代さんを死なせないで」という投書が相次いだというが、実は夢千代、「不老不死」なのかも知れない。

We Can Work It Out.

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

先日、NPO本の学校の主催で一月十二日に行われた「ま
ちの本屋をめぐる旅 IN 鳥取」にて、登壇者として話す
機会をいただいた。

お相手はNPO本の学校顧問の永井伸和さん、コーデ
ィネーターとして鳥取県立図書館の高橋真太郎さんという心
強い（もしくは手強い）お二人との座談会形式で、ぎっく
ばらんにおしゃべりするという企画。タイトルは「いつか
まちの本屋をやりたいかった人と、思いがけずまちの本屋を
はじめた人」で、前者が永井さんで後者が私。

永井さんの、書店・出版社・図書館と本に関わる業界全
体を視野に収めたとしてもなく幅広く深いお話は、自分の
知識では全く追いつかない。それでも、前職で二十年近く
その仕事を身近で見ることができたのは、貴重な経験だっ
た。「まちの本屋をやりたいかった」部分をもっと引き出せ
なかったのが、反省点その①。

さて、私の出番。久しぶりに人前で話す、しかもオンラ
インではなくリアルだったので、ちゃんと内容をまとめて
おこうとスライド資料を作って臨んだところ、伝えたいこ
とがどんどん膨らんでしまい、持ち時間三十分のところ一
時間ちかく使ってしまった。反省点その②。

内容に関しては、今回は非公開とのことだったので、新
刊と古書の在庫と売上がどう変化していったか、それによっ
て経営的には何が必要になるかなど、かなり具体的な数字
を盛り込んだ。

また古書を取り扱う面白さと難しさについても、開店し
てから実際に経験したことを交えてお話した。こちらの予
想をはるかに上回る蔵書をお持ちの方から買い依頼があ
り、ありがたく且つプレッシャーを感じる。また「処分
しようと思っていたから差し上げますよ」という方も時々
おられて、買い取りの時とは違うプレッシャーがある。

その後は来場者との質疑応答で、色々な質問を投げかけ
ていただいた。本屋をやっている／やろうとしている方も
何人かおられて、仕入などテクニカルな質問が出たのが興
味深かった。

企画段階の打合せでは、「十人くらいで車座で話す感じ
で」だったが、ふたを開けてみれば定員の三十人を大幅に
上回り、当日参加の方を含めると四十人弱の方にお越しい

ただき。会場のマーチングビルとしては過去最大の人数だったらしい。これだけたくさんの方が「まちの本屋」に興味を持って、感謝するとも、本を売ることも、と真摯に向き合わねば、と改めて思った一日だった。

現状、本屋で得られる儲けよりも、それ以外の仕事で得る儲けの方が大きいことも、正直に話した。

一方で「街に本屋は必要だ」という論調に、安易に乗りたくないのも本心だ。紙の本の売上はじりじりと下がり続け、景気回復を体感で感じることは全くなく、紙の値段も上がり、物流問題は解決の糸口すら見えない。ナショナルチェーンの書店ですら、厳しい状況に追い込まれている。コミックが強い大手の出版社は、すでに紙の本の売上よりも電子書籍の売上と映像化などの版權ビジネスでの売上の方が高くなっている。中小の出版社は倒産や廃業が止まらない。不安になるニュースには事欠かない。

それでも、ノスタルジイの対象にはされたくないし、まだやれることはたくさんあるはずだ。

私の話がどんな風に伝わったかは分からないけれど、それでも本を売ることを通してたくさんの方と出会い、ヒントをもらって、小さな実験と実践を繰り返し、本屋の意味を考え続けている。

【参考文献】

『橋浦泰雄伝』鶴見太郎 晶文社

地元の仲間（尾崎翠も！）を巻き込んだ文学活動から始まり、師である柳田國男を支え、当時すでに失われつつあった地方の風習を記録しながら、民俗学の全国組織設立実現に向けて日本各地を奔走。戦後は生活協同組合を創設と、今を生きる我々へのヒントが詰まった一冊。長らく版元品切れなので、講談社学術かちくま学芸文庫に入ってほしい。

『杉原一司歌集』小取舎

書肆侃侃房から『塚本邦雄歌集』も出たので、塚本に影響を与えたと言われている杉原一司の歌集も、もっと売りたい。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (23)

村瀬 謙介

(小取舎)

小取舎を立ち上げて四年経つが、「小鳥舎」という宛名で荷物が届くことがたまにある。小鳥ではなく小さい取り扱い、小さい取次などの意味があるのだが、鳥取の出版社ということもあり、どうしても鳥のイメージがついてしまっているようだ。

先日、調べ物をするために図書館に行った際、『日本一バズる公務員』（守時健、扶桑社、二〇二二年）という本が目に入った。高知県須崎市のご当地キャラクター「しんじよう君」をプロデュースした新人職員のノンフィクション。しんじよう君はカワウソであり、日本で最後に二ホンカワウソの生育が確認された新荘川が名前の由来。絶滅してしまった友だちを探しに旅をしながら、①須崎市のPR②須崎産品の販路拡大③須崎の元気を創ることを目的に活動している。バズる以前、高知に旅行に行った時に自分用

のお土産として、このしんじよう君の古銭入れを買った。その数ヶ月後、全国一のゆるキャラを決める「ゆるキャラグランプリ」で見事一位。しんじよう君の全国的な知名度人気が上がったことで、人口約二万人の小さな市が一つのキャラクターによって寄付額が千倍になったほどの革命が起こった。熊本県のくまモン、株式会社リクルートが行うポイント事業のぽんた、携帯会社やLINEの動物たち。キャラクターは単なるマスコットではなく、ブランドの記憶と興味を不動のものにするための最高のツールとなる。一昨年、伊藤園がお茶のコマーシャルにAIの女優を起用し話題になった。企業にとっては不祥事を起こさないイメージキャラクターは安心して使用することができ、今後も増えていくであろう。

さて、本の世界では「猫」が人気なキャラクターである。猫は「癒し」や「知的」な象徴があり、読書と相性が良い。村上春樹作品やルイス・キャロル作品など、文学によく登場し不思議な存在として物語を彩っている。定有堂も猫のイメージがある。ホームページのトップにも猫が本棚におり、本購入時の紙袋にも猫が描かれていた。元定有堂の二階にあるSHEEPSHEEPBOOKSはその名の通り羊二匹が本を読

んでいる。出版界では新潮社のパンダや講談社文庫のしろくま、ロンドンではペンギンブックスが有名だ。

起業時に作らなかった小取舎のキャラクターを作ろうと思った理由として、一つは購入いただいた本に、しおりを入れたいと思ったからだ。ブックカバーやオリジナルの付箋なども考えたが、あくまでもおまけなのでコスト的に無理だ。しおりなら価格もたかが知れている。しおりのデザインを考える時に、小取舎の名前やアドレスだけというのも寂しい。何かキャラクターがいれば。

二つ目の理由としてグッズ展開もできるということがある。儲けというよりブランドアピールですね。実用性と日常性を共有するトートバッグやTシャツなどにもキャラクターがいれば宣伝材料になる。

三つ目として、広報担当にもできるということ。魅力的なキャラクターならSNSにも登場させてメッセージを伝えることができる。四十肩のおじさんが出るより見栄えはいいはずだ。

といったところでやはりキャラクターは動物か。鳥取県のPRマスコットといえばトリピー、鳥取大学もとりりん、鳥のキャラクターが鳥取県は多いが、小取舎は鳥ではない。ますます字の違う社名で認識されてしまう。あ、ちなみに社名を小鳥社としなかったのは、雑貨屋さんや色々な「小鳥社」がすでにあつたからでSEO対策です。

色々調べると、まあ猫も好きなので良いのですが、イタチ科の「いいずな」という可愛い生物を見つけまして。ミリアキヤットみたいな立ち姿でうちの0歳児がちょうど立てるようになった姿と重なる。いいずなは、夏は背中が茶色で、冬は毛が真っ白に変化するという特徴がある。「最小の肉食獣」という珍しいフレーズも、ユニークで意味深い。まさに色々なテーマの本を雑食のように作る小さな出版社にふさわしいキャラクターになると思いませんか皆さん！？（あ、名前も考えねば…公募するか）

・小取舎の刊行物

『宇沢弘文「社会を治す」

社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



これでいいのだ

古賀 啓三

(米國ミシガン州)

ルに宿るのであろう。要領の悪い食堂の女中、アルテミーズも、「言われたことはすべて忘れるし、何も耳に入らないからで、それに絶えずビリヤード室のドアをきちんと閉めないの、掛け金の先が壁にあたってかたかた」いわせる。作者が息をひそめ、深く沈潜して獲得するヴィジョンの、かなめとなるかけらが震えだす。

バルカス・リヨサに一読後、「あ、そうか、小説ってこう書けばいいのか!」と言わせた『ボヴァリー夫人』を僕も読んでみたが、リヨサと同じ啓示を追体験することはできなかった。

このペルー人留学生がフランスに渡り、『ボヴァリー夫人』を手にとったのは一九五九年、二十三歳のときであった。「作品の文学性はテーマよりも、テーマを処理する技法にある」という創作に対するリヨサの姿勢は深く共感を感ずるものであるが、この思想と、「こう書けばいいのか」という啓示が直結したものであったか否かは不明である。もしそうであったとして、では感銘を受けた「技法」とは何であったのか? 冒頭で長い引用をした過剰で饒舌なディテールではあり得ない。それはリヨサの作品には不在だから。

十二月の始め、十日ほど日本に帰国した。二〇一八年に母を亡くし、二〇二二年に父が九十三で逝って、翌年一周

「それは二つの大きな車輪に支えられた黄色い大きな箱で、車輪が幌の高さまであるので、乗客は外の景色も見えず、肩までハネで汚れた。上部についている狭い窓の小さな窓ガラスは、馬車の扉が閉まっているときには枠の中でがたがた震え、古くからの層になったほこりにまじり、そこかしこに泥の汚れをこびりつけていて、にわか雨が来ても完全には洗い落とせなかった。馬車には馬が三頭つながれていて、二頭の前に一頭だけ先に配して、そうして坂を下るときには、馬車の底が地面をかすってしまい、がたがたと揺れた。」書き方の癖、というのには誰にもあって、冒頭は、フローベールの、主人公夫妻が転地に使う乗合馬車の描写である。その細部への拘りは、神経症的ですらあるが、この人にとっての虚構との戯れとカタルシスは、いや、この作家にとっての創作という作業の核心はディテ

忌で戻った際にはまだ「帰国」の感があつたが、米国に帰化している身にとつて、日本で税金その他の納付が発生するのは面倒で、両親が隠居していた福岡の住まいを含め、不動産類は全て処理してしまい、もはや帰郷の心持ちは極めて希薄で、十二月の始めの十日間ほどは、長崎から博多、岡山、東京と「日本国内を旅行した」という方が心情的にはより正確である。この旅行中ずっと『ボヴァリー夫人』を読んでいた。旅というのは、日常の「ケ」からの逸脱であり、そういう高揚の中で読むと、主人公エンマがフランスの片田舎に於ける凡庸な町医者との結婚に対して感じている、行き詰まり、無為、倦怠、欲求不満、焦燥がより鮮明になるが、と同時に、当方の根無し草的帰国も、アメリカの片田舎の森の中の隠遁生活に倦んだ拳句の安手の逃避行じゃねえか、という、したくもない自省に追い込まれ、鼻白む。

この作品の語り手は、非感傷的な近代的ヴォイスだけど、その過度の非感傷・客観は無慈悲ともいえ、主人公エンマの尊厳など全く眼中にない。紹介こそ「彼女の美しいところは瞳で、褐色なのに、まつげのせいで黒く見え、その視線は無邪気な大胆さでためらわずにこちらを見つめた」、と穏健であるが、やがて「黙っているときには軽くかむ習慣のある唇があらわになり、それは少しばかり分厚かった」

「美しい歯並びがのぞき、そのあいだから舌の先がにゅつと出て、グラスの底をべろべろ舐めた」と露悪的ですからある。薬剤師オメーの描写なども例の過剰さで俗物性のディテールを言い募り、その仮借のなさはゴシップ・ジャーナリズムを思わせる。この薬剤師オメーというのは不思議な登場人物で、その役どころは極めて副次的と思いきや、物語の最後の一行は薬剤師の叙勲を告げて終る。冒頭の数ページだけ現れて消滅する「僕たち」という一人称複数のヴォイスに比肩する異様さである。この始まりと終わりの異形を偶然とする作家はいない。はず。と思う。

『ボヴァリー夫人』読後の追体験、ということに話を戻せば、同じく不倫をテーマとした古典、トルストイの『安娜・カレーニナ』を読んで、なんだこれは、ただの通俗小説じゃないか、という感想を得たことを思い出した。ゴシップ・ジャーナリズムという印象の意外性は古典の名作という先入観を持って読むからで、読み進めると、書かれている内容とちぐはぐ感はなくない。それはこの作品も通俗小説に過ぎないからである。小説のテーマなんかこんなんだいいんだ、というのがリョサが受けた啓示であつたのかも知れない。

汽水のほとりから (46)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

歡喜の声をあげるパレスチナの人たちの写真とともに「ガザ停戦合意」の白抜きの大字がおどった1月17日付日本海新聞のコラム海潮音に、先日急逝された高多彬臣(よしとみ)氏の逸話が紹介されている。葬儀の翌日に届いたキリスト教雑誌『信徒の友』を家族でめぐって見たところ、故人が昨年の秋に投稿した歌が特選を受賞していてドキッとしたという話。特選に選ばれたのは、「傷つきしガザの子どもの映像を立ちて消したり曾孫六才」という歌。まさに同紙面の見出しと平仄が合っていると感じた。

そのコラムでも触れられていたが、高多氏は元教師で、県立図書館館長を歴任された人。短歌を好み、日本海新聞歌壇の常連でもあった。それで一つ思い出した話がある。数年前、日本海新聞にたまたま高多氏の「「息白し」と君の最後の句は終わる面影うかぶ寒の夕映え」という歌を見

かけた。歌の中に出てくる「君」とは、元高校の国語教師で、日本海新聞の俳壇の常連でもあった岸本俊彦先生のことだ。私にはそれがすぐに分かった。それというのも、その少し前に先生の「再会の言葉とならず息白し」という句が同紙の俳壇に掲載されたのを覚えていたからである。ある事情から、私はどうしてもその句が自分に向けられて詠まれたと思わざるを得ず、その想いを胸に同紙の投稿欄「散歩道」に先生を追悼する一文を寄せることになった。右の高多氏の歌を拝見したのはその直後であったと思う。それまでお二人が交友関係にあるとは知らなかったため、その歌の内容をむしろ意外な面持ちで眺めたのであった。

ところが、それから間もなく、私が投稿した文章を新聞で目にされた高多氏から私宛てに一通のハガキが届いた。文面には「前略 過日「散歩道」で岸本先生追悼のことはをお書き頂き故人の友人の一人として有難く存じました。ご最後の数ヶ月前までハガキを交換していた私としてまことに残念で悲しいことでした。私の挽歌二首お読み頂けたらと思います」とあり、次の二首がしたためられていた。

「*「再会の言葉とならず」君が句にこめしいまわの想い切なし*「息白し」と君の最後の句は終る面影うかぶ寒の夕映え」つまり、高多氏は岸本先生が最後に投稿された句を上句と下句に分ける趣向で挽歌を二首詠まれ、私が

偶然新聞で見かけたのは、その二首目だったわけである。

ハガキの末尾は、「老生は今年八八才 倉吉西高を離任したのは三十年以上の昔となりました。出身高校のことお書でしたがどの学校でしたか」との問いで終わっていた。これを問われたのは、私の投稿文に「嘗ての高校の教師は学者のようにアカデミックだった。私が出た高校では当時、先生方が各々の専門性を活かして寄稿され、同人誌のような小冊子が毎年発行されていた。岸本先生も詩のある風景と題して、河本緑石や生田春月の詩句を紹介されていたのである。そうした文化が今の高校に絶えて見られないのは寂しい」とあったからだが、高多氏もまた間違いなく「アカデミック」の語が似合う教師の一人だったはずだ。

氏には著書が数冊あるが、『エマニユエル・ムーニエ、生涯と思想』（青弓社）という学術書も上梓されている。ムーニエ研究の単行本としては恐らく日本で唯一のものである。ちなみに、この本の巻末の「あとがきに代えて」は氏の精神遍歴を知る上で貴重な文章であり、ムーニエは勿論、多くの本や人との出会いについても記されている。出版社に紹介の労をとってくれた恩人として定有堂書店の奈良さんの名前も出ており、その経緯については以前に奈良さんに伺ったことがあるが、高多氏はどうやらはじめ定有堂書店からこの本を出したいと思われていたようだ。が、

奈良さんはそれは難しいと判断され、東京の知り合いの出版社を紹介されたということだったと記憶している。お二人は県立図書館を通じて親しくされていたのだろう。

ところで、ムーニエの翻訳はいくつか出ているが、特に心魅かれるのが『人格とアナーキー』（法政大学出版局）という本である。その中でムーニエは、「いまや明らかのように、ここに述べた人格主義の概観とアナーキズムの図式とのあいだには、多大の差があると同時にまたかなりよく似通った点もある。総括的な印象のうえでどこか似通った点があつて、そのためこの概観は、マルクス主義の図式よりもむしろ、アナーキズムの図式を想い浮かばせるのだ。それというのも、アナーキストというあの活気に溢れた人たちはその思想のなかに体系よりも予感のほうを豊富に持ちこんでいるからである。（後略）」と述べている。ムーニエによれば、アナーキズムの魅力はアナーキストの快活な人格と彼らの未来を見通す豊かな感性とにあつて、それは彼が唱えた「人格主義」に通じるというのである。

今はもう叶わないが、ムーニエの「人格主義」について高多氏に一度詳しくお話を伺ってみたかった所以である。

身のない話 (前)

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

フェイクブックという言葉があるらしい。

駄洒落ではない。偽書、という訳でもない。

敢えて言うなら「本…のようなもの」ということになるだろうか。

要するに、外装は「本」そっくりだが、中身がない、テキスト不在の「本」もどき。

そういうオブジェというのか、アイテムばかりを蒐集しているコレクターもいるようで、『フェイクブック』(アルミン・ミュラー著、グラフィック社刊、二〇二五)という美術書が出た。

素材は、紙、革、木、陶磁、石、象牙、金属など。

用途は、誠に様々だが、小物入れが最も多い。

他に、文箱。煙草入れ。マッチ箱。ライター。文房具箱。筆立て(携帯用)。裁縫箱。聖典やロザリオ入れ。ブックエンド。カード(トランプ)ケース。

菓子容器、ピルケース、コーヒー・紅茶容器、酒瓶に仕立てたもの。

白粉、香水入れ、ペンダント、指輪、ボタン、カフリンク、タイクリップ等々。指輪仕様は、蓋が開いて、物が入るようになっていいる。カンタレラでも仕込んだのだろうか。

雑貨店やインテリア・ショップに行くと、今でも、当たり前のように本を象った小物入れを売っている。革装の洒落たものから、百円均一のチープなものまで。

物入れとしての起源は相当古そうである。

とは言っても、本の形状が冊子体になって以降の話(それ以前だと、巻物体だから、隠せるのは短い槍くらいだ)であろうから、早くても中世以降。それも、羊皮紙写本を細工する、という発想は一寸生まれにくいと思うので(使われる場所や希少価値、価格などを考えると…。それに、隠すもの自体の小型化が必須になるし)、紙の冊子本が登場して以降、ということになるだろうか。

そう言えば、007の映画に、本の中身を割り抜いて、

その中に拳銃を隠す、というアイディアがあったが（『ダイヤモンドは永遠に』）、漫画『愛と誠』では、影の番長（一）が持ち歩いているツルゲーネフの『初恋』（というあたりが梶原一騎）の中に、得物のナイフが収められていた。和田慎二も『朱雀の紋章』の中で、拳銃を隠すのに同じことをしていた。

本を割り抜いて、武器を隠すという風習は結構古いようで、調べてみると、十七世紀のヴェネツィアの元首（ドージェ）が注文した、ピストル入りの祈祷書というのがあった。

しかし、本（のページ）を割り抜くのは、言う程やさしくはない。カッターナイフで切っても中々均等にはならないし、深くなるにつれ、切り辛くなる。レーザーカッターでもあればよからうが、それだと焦げそうでもある。切ったら切ったで、今度はページがめくれないうようにしないと物入れにはならない。切り口に内張など施さなければならず、相当に手間が掛かる。

一方で、トロンプ・ルイユ（騙し絵）というのもあり、例えば、ジュリオ・ロマーノが手掛けたテー宮殿の内装には、壁に描かれただけの書棚があったし、チュルゴーの書齋にも、同じような趣向があったと聞く。

江戸川乱歩の某作品には、鎧の緞（おどし）のように、本の背表紙だけを連ねて、まるでエビかダンゴムシの如く背中に背負い、本棚の中に潜む、というトリックがある。家具売り場や住宅のモデルルームなどで、箱や背だけの本を並べて見せるやり方である。全集のカタログに、外装だけの全巻揃いの写真を載せるという例もある。

カラオケならぬ、カラ本と申すべきか。

出版界でも、販売を目的としないカラ本が存在する。「束見本（つかみほん）」という。

出来上がりの佇まいや店頭での効果を見るため、出版社が作らせるもので、カバーや帯、本の厚さだけは本物で、本文は印刷せず、真っ白（あるいは、最初の数ページだけ印刷）なまま、というものである。

全集や画集など大型企画の場合にも、プロモーション用に作り、主要書店に配られることがある。書店は、顧客にパンフレットと束見本を見せ、注文を取って回るのである。

内坪井町日記 (9)

齊藤仁昭(ケバブジョンソン)

元長崎書店勤務)

くる。

十二月末日

夕方から出勤し妙見宮での初売りの準備。徹夜になるの
で低いテンションにて準備。準備後、妙見宮に向かいセツ
ティング。19時ごろからぼちぼち販売開始。忙しくなる。23
時過ぎごろまで3人で休憩を回す。休憩中は車中にて寝袋
で仮眠。割と眠れた。ひと眠りしてストープの上のおでん
を少し食べて働く。

一月一日

妙見宮にて年越し。寒いが天気も良く初詣日和で賑わっ
た。2時くらいにピークが過ぎ、いったん閉めてまた仮眠。
5時にまた開店。夕方まで走り抜ける。

いつもはこのまま熊本市に帰っていたが眠気がやばいの
で今年は八代に宿を取った。家族も合流。部屋が異様に狭
く、ほんとに4人部屋だったのだろうか。子どもたちとの
んびり年越しがしたかった。1月3日まで初売りは続き、
売り切った。

一月某日

長男が四月から小学校に入学するにあたり、学童保育の

十二月某日

イベントを無事に終え、次はいよいよクリスマスと年末
年始の対応へ突入。去年もそうだったような気がするが事
務の女性が風邪にてダウン。不慣れな業務もかぶさってき
て大忙しだったがなんとか乗り切る。だいたいいつもなん
とかなっているが、いつか事故が起きそうで怖い。

十二月某日

まったく休みが取れず疲れた。疲れると副鼻腔が腫れて
鼻が詰まったり頭がぼんやりしたりするので耳鼻科へ。い
つもより調子が悪く先生に見えたのかレントゲンをいちは
う撮ろういうことで撮ってもらったら、もやがかかってお
りやや違和感ありとのことで、紹介先でCTを撮ってもらっ
て来るように言われる。なんか病気だったらやだな。いつ
もの去痰剤をもらう。これがよく効くん。青っ漢出しま

説明会に参加した。実際に学童保育をしてくれるという教室にて担当の方と面談。何というか、ここで夕方まで保護者の帰りを待つには読書か勉強するしかないという雰囲気の一部屋。長男は大丈夫だろうか。飽きないかな。なんだか申し訳ない気持ち。はやく主夫になりたい。

学童保育という名がなかなか体に馴染まず、名前も覚えられないので、勝手に「街角クラブ」と呼ぶことにしている。そっちのほうが楽しそうだし。教室でDVDは見られそうだったのでうちのイオセリアーニ集でも貸し出せたらよいのだが。

一月某日

予約していたCT撮影のために某病院へ。初めて行ったがそこそこ大きな病院だった。そういつ設備があるから当たり前か。撮影は淡々と終わって、結果を聞こうと思ったら、今日は撮影のみで診断書などは紹介元の耳鼻科へ郵送されるとのこと。手間だが仕方ない。

一月某日

耳鼻科へ。CTの結果を聞く。おそらく鼻の奥がカビているので手術をお勧めすること。カビかー。なんだそれ。しかしショックよりも、原因がわかってすっきりした

のと、仕事を休めるんじゃないかといううれしい気持ちになつてしまい、大人になれない自分を情けなく思う。

左側の副鼻腔に症状があるのだが、後鼻漏がひどかったり、左目がなんだか開けにくかったり、左耳の奥に痛みを感じたり、左顎にしこりを感じたりしたので納得。全部年齢のせいだと思っていた。手術したらこれ全部すっきりするのだろうか。素晴らしい。はやく手術をしたい。

耳鼻科の方から手術をしてくれる病院へと診察の予約をしてくれる。診察が夕方だったため翌日以降に紹介先から電話が入るとのこと。

一月某日

紹介先の病院より電話あり。診察日を決めたが、手術は一年待ちと言われる。カビが生えているとわかっているのに一年待つのはつらいと伝えると、まず診察してみても考えましようかとのこと。素直に従う。

演じるための身体

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

年末、歌舞伎を観に行った。坂東玉三郎が出ている『天守物語』が目当てだった。

私自身は、年に2、3回は母と一緒に歌舞伎を観ているものの、古典に通じているわけでもないため、素人だ。(その上、今回は、仕事終わってから羽田空港へ飛んでいき、劇場にたどり着いたので、体力をほとんど使い切って、上演中は疲れてしまった。反省。)

玉三郎(以下、敬称略)といえは、現代歌舞伎女形の名手である。などと、簡単に言ってしまうは、それまでかもしれないが、生きる伝説のようなところがある。(本人は、現在後進の育成に励んでおり、なかなか歌舞伎座で観る機会がない。『天守物語』も、もう主役の富姫での出演はないと思っていたところだったから、これが最後に観られる機会だと、無理やり千秋楽に駆け込んだ。)

と、開幕してすぐに、玉三郎の凄みに直面する。富姫が現実の世界の住人とは異なる天守の主人として「可憐」に現れる。役者の実年齢を考えたら、「可憐」というのはお

かしな話なのだが、他の歌舞伎俳優の身体性とは全く異なる女性の演じ方なのだ。玉三郎が現代劇で実際の女優(とあえて書く)と女性役で共演していると言う事実も、確かにありうるものだと思感した。それだけ、違和感のない線の細さで、まさしく「異界の人」だった。そこから登場する図書之助の市川團子は、その富姫と惹かれ合う。そんな「可憐」な富姫が惹かれる図書之助なので、凛々しく見える。相手役が惚れている芝居をすれば、それだけに値するように見えるのだろう。

ちなみに、私が歌舞伎で一番好きなのは、今回富姫を演じた中村七之助だ。神々しい姿で登場し、切れ長の目で観客を見つめるので、惚れ惚れしてしまう。いつも堂々とした美しさを放つ役者だ。その一方で、玉三郎から感じた「可憐」さは、玉三郎の稀有な身体性を印象付けた。

歌舞伎とは逆に女性が男性を演じるのが、宝塚歌劇だろう。男役と呼ばれるスターたちは、髪を短くして、大股で歩く。蹴り上げて足を組んで座る。男性らしく見せるために、肩パッドがいれられた衣装。あまりにも誇張された男性的な振る舞いをしながら、歌にダンスに芝居のミュージカルやレビューを演じていく。

宝塚は、中高生時代のめりこんで、大学の卒論でも扱ったが、最近は観ていない。(ので、こちらも素人。)

歌舞伎が伝統芸能として、芸の継承を行う一方で、宝塚もそのような傾向はありつつ、新陳代謝が激しい。まず、入団するには、宝塚音楽学校に入らなくてはいけない。卒業後、キャリアをスタートさせても、退団というゴールがある。結婚すれば、劇団にいないことができないので、引退せねばならない。歌舞伎が子どもや次世代に芸を伝える男社会の一方で、宝塚歌劇は結婚でキャリアに一区切りせねばならない女社会を象徴している。

人気である男役の身体性にばかり目がいつてしまうが、宝塚ファンにとつては、相手役となる娘役も重要だ。彼女たちが惚れ惚れして、舞台上でも裏でも相手役を支えていると思っっているからこそ、男役スターが美しく映える。相手役との化学反応が大事なものは、どのような舞台にも共通するのだろう。

「女性だけが舞台上上がるスタイルは、日本には歌舞伎という伝統芸能があったから、浸透した」ともいうが、実は「少女歌劇」のアイディア自体は、ヨーロッパから輸入されたもので、二十世紀頭頃まで、行われた興行スタイルだ。また、男性だけが演じる舞台も、かつてシエクスピアが活躍していた頃は、少年俳優が女性役を演じていたことからも、ヨーロッパにも存在していた。

この冬、チェコ出身のアーティストであるアルフォンソ・

ミュシャの展示に行った。十九世紀、ポスター作成からキャリアをスタートした彼の初期の作品は、フランスで一世を風靡した女優・サラ・ベルナールのポスターだ。

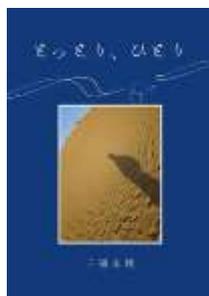
彼女自身、さまざまな役を演じている。ミュシャが描いたポスターの中でも、美しいアテネの妃である「ジズモンダ」から、復讐に燃える憂鬱な王子の「ハムレット」まで。多彩な魅力を放っている。彼女がどう舞台空間を支配したかは、想像するしかない。しかし、そのポスターが表すような、何にでもなれる特別な身体性を持っていた役者だったのだろう。

舞台上ではジェンダーから飛躍している役者たち。

一方で、その演技を通して私たちが観るのはいわゆる「このジェンダーであれば、こうである」というステレオタイプでもある。しかし、そのステレオタイプの単純なイメージをも超えられることが、役者の身体性の真髄なのかもしれない。まさしく彼らは「異界」からやってくるのだ。

三浦永理・著

「とっとり、ひとり」



星をみる

あきの素生

(くうねるめがね)



職場から出て、息を吐きながら空を見上げると、オリオン座が真ん前にあつて少しばかり面食らつた。久しぶりに

見たオリオン座の大きさが思いがけないものだったからだ。こんなに大きかつたつけ、とか、そういえば冬の星座なんだつけ、とか考えながら、駐車場までの道を歩いた。道中、きよろきよろ空を見渡すと、よく光る星がいくつもある。名のある星なのだろうなあと思いつつ、その星の名どころか、候補すらひとつも思い浮かばない。ほかの星座も見分けれない。ただ漫然と星空を眺めるだけだったが、寒さを束の間忘れるくらいには心を捕らえられるできごとだった。

星を見るのは好きで、夜空をよく見上げた。きっかけは、子どもの頃キャンプで見た流れ星だったのではないかと思

う。わりと短時間のうちにいくつ流れ星を見ることができたような記憶がある。いつ流れるかいつ流れるかと待ち望んでいるところに、ある瞬間突然、すう、と星が流れる。じりじりとしていた気持ちが一瞬で蒸発するような感覚に、すっかり虜になつてしまった。ある程度眺めていれば流れ星が見られるのではないかという淡い期待で、夜空を見る癖がついた。そして、よく見れば見るほど、そうそうお目にかかれるものではないと知ることになった。なかなか見られないとなると、俄然見たい気持ちが高まる。

長じて、流星群なるものを知つた。一九九八年のしし座流星群は、家から見た。綿入れを着込み、あたたかい飲み物を水筒に入れて、家から見える夜空をじつと見上げた。家からは、夜空が全方向見渡せるわけではないが、それでも、いくつもの流れ星を見た。また流れるかもしれない、次流れるのは一秒後かもしれないとやめどきがわからず、二時間は粘つただろうか。水筒の飲み物も尽き、芯まで冷えた体で自室に引きあげた。

二〇〇一年のしし座流星群も、家から見た。この年の流星群は、とても大規模なものだった。家から見える半分の夜空でも、かなりの数を見ることができた。くわえて、隕

石かと思うほどの大きな流れ星がいくつもあった。後で「火球」と呼ばれると知った、この流れ星の緑色の光とその軌跡が、今でも記憶に残っている。

この経験から数年間は「またあれが見たい」と、流星群のニュースを見つけては夜中に起き出し、空を見上げた。でも、あの年のしし座流星群ほどのものはそうそうなく、翌日の活動に支障が出るほどの懸念もあって、だんだんと流星群や流れ星を見ることから遠ざかっていった。

去年の秋に、実家に帰る機会があった。盆と正月くらいしか帰省しないので、久々の地元の秋だった。短期間の滞在で、ばたばたと過ごした。ちょうど祭りの時期で、夜になると、少し離れたところにある神社から神楽の笛の音がかすかに聞こえ、懐かしさがひたひたと心を満たした。

そんな中、偶然オリオン座流星群がピークを迎えるというニュースを見かけた。しし座流星群の思い出が湧き上がり、懐かしさがあふれ出たようだった。疲れを溜めることは避けたく、目覚ましをかけてまで起きるのはためらわれたが、もし夜中に目が覚めたら、久しぶりに見てみようかな、と思いながら床に就いた。

おあつらえ向きに、夜中に目が覚めた。いつもなら睡眠時間が少なくなることとうんざりするのだが、すべきことがあり、気を揉む必要がなかった。さつと上着をはおり、部屋の外へ出た。以前と変わらず、半分の夜空を見上げる。しし座流星群が現れる十一月頃より暖かく、綿入れなどで着ぶくれることなく過ごせる。近くの街灯、遠くの街の灯が気になり、効果があるかはさておき、手で視界の下辺りを覆ってみたりする。星を観測するには、おそろしい条件ではなかった。オリオン座の姿は見えず、流星群は「もう半分」の夜空で見えるのかもしれないと危惧しつつ、ひとつでもいい、流れ星を見られたら、と薄明るい夜空に目を凝らす。

視界の中に、すう、と白く短い線が現れ消えた。かすかに、静かに星が流れた。ああ、流れ星だと思った。二十分くらい夜空を眺め、もうひとつ流れ星を見て、部屋に戻る。それで十分だった。願いは流れ星を見ること。あふれ出した懐かしさをすくい上げて、満ち足りた気持ちだった。

ご案内



ドラメリア (座敷わらし)

◇ 定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ヒオトープ」

それぞれ会場は とりぎん(県民) 文化会館

◇ 定有堂教室と太極拳の詳細は左のQRコード参照



定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)

『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル(ボルゾイレコード)・食堂カルマ

・SHEEPSHEEP BOOKS(定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

◇ 太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所

毎週 ①水曜 19時半から ②土曜 13時半から

◇ それぞれ会場は 市役所 麒麟スクエア



・編集後記:

ついに、置き配対応のための宅配ボックスを設置することにしました。集合住宅の通路突き当たりだからできるワザ。設置の結果は革命的に快適ですー待っている方も届けてくださる方も、ストレスが大幅に軽減されました!

ドラメリア(編集長)

二月の始め大阪駅周辺で三砂慶明さんと膝つき合わせてお話しする機会が持てました。「読書室」の活動などたくさんの方の予定をうかがいました。もちろん三砂さん編集の『本屋のパンセ』のことも。手始めに2月23日神戸「1003」にて刊行記念イベントを実施されます。

高倉美恵さんの新刊『眼述記』忘羊社をいただきました。著者十年の記録です。

奈良敏行(発行人)